

イナゴは食べたがバッタは食べない

物語：イナゴは食べたがバッタは食べない

瀬田康司

はなしの前に

主人公はぼく。ぼくの小学生時代の「食」にまつわるはなしである。

ぼくの子どもの頃の思い出など綴っても何の社会貢献にもならない（キッパリ、と）。逆に、害をばらまくことにもならない（オズオズ、と）。じゃあ、ぼく自身にとってどのような意味があるのか（フンフン、と）。・・・こうした問いそのものが無意味である。

少年期は大人の原点だとよく言われる。偉人伝などはまさにその筆致で満たされている。たまに少年期と大人期との大きなギャップが綴られることもあるが、それは大抵、だめだった子どもでも頑張れば立派な大人になれますよ、という教訓話となる。エジソン話は有名だ。つまらない話だ。そして、立派だった子ども期を過ごした人が大人期はだめになった、というような伝記はお目にかかったことがない。新聞の三面記事を賑わすだけだ。

大体から「だめ」とか「立派」とかの人間性評価基準は何なのでしょうねえ。

はなしがだんだん大げさになっていく。そういうことを綴ることが目的のこのおはなし？ちゃいまんがな。まあとりあえず、茶飲み話だと思って下さればありがたい。へー、ホー、ウッソー、今風のゲテモノ言語キモーイというのも入るか？そういう類の相づちが寄せられるような、ひつまぶし、違った、ひまつぶしばなしになればと思う次第。

お時間とお心の許す限り、おつきあい下さいませ。 ペコリ

とりあえず、ぼくの小学生時代はどんな時代であったのかというと、昭和 25 年の朝鮮戦争（7 歳）、昭和 27 年の保安隊設置（9 歳）、昭和 29 年の第 5 福竜丸、洞爺丸台風（11 歳）ははっきりと記憶に残っている。昭和 30 年宮城まり子が歌う「ガード下の靴磨き」がラジオから流れてきたのがぼくの戦後イメージぼくという 1 人称を越えた客観的な日本戦後史を固定したと思う（12 歳）。ひ弱な身体を持ち主であったぼくは、ラジオから聞こえる東富士、照国、吉葉山、千代ノ山、鏡里、栃錦、若ノ花ついでに若ノ海などのおすもうさんに、心を熱くし、脳内スポーツ少年に自己形成をした。小学校高学年頃のことである。花菱あちゃこ、浪花千栄子、横山エンタツなどの笑いも記憶に残る。これらについては、ネット・サーフィンでお調べ下さいな。

イナゴは食べたがバッタは食べない

第1話 カエルは食べたがへビは食べない

ぼくの出身県は三重県である。「伊勢の名物、赤福餅はえじゃないか♪」とか「桑名の殿様蛤食ってお茶漬けさらさら♪」とか「伊賀の堅焼き歯が立たぬトンカチかちかちまだ割れぬ♪」等々、リズムをもって語られる伝統的な食文化も少なくない。しかし、一時は主要産業の扱いまでされた養殖・食用蛙（ウシガエルの養殖）について知る人は、今はどれほどだろう。そう、三重県は、あまり豊かとは言えない（耕地面積がさほど広くはない）農業の副産物として、大正期末期から食用蛙の養殖が行われた。

ここからはぼくのひとりごとを交えて・・・。

けどねえ、わが国の一般的な「貧困」農家副業として、蛙の肉の生産とはちと計算違いでねえかい？確かにやがて来る戦争体制下においては重要な食料となったでしょうけど、獣の肉は高価なのでともかくとして、鶏肉・兎肉や魚肉・貝類は比較的安価で手に入る。それらの養殖などは三重県お手のもの。そんなところへわざわざ蛙なんて、ねえ。おまけにさあ、ぴよんぴよんぴよんぴよん。あっちいってぴよん、こっちいってぴよん。つまりね、囲いから逃げ出すのが多かったんでねえかねえ。つまり、安定した食料にはなり得ない宿命であったんでがんしょ。

はなしのついでに、この食用蛙の餌として昭和初期にアメリカ・ザリガニが輸入された。今や、蛙もザリガニも、産業目的で養殖する者はほとんどなく、我が大和の自然環境の一部であるかのような顔をして我が物顔でのし歩いている。いずれもアメリカ産。っ・・・って、まったくもう、アメリカって奴は・・・。

その養殖蛙産業がすでに斜陽になり始めた頃、つまり、ぼくの小学校低中学年の頃、ぼくは、蛙の骨付きモモ肉なるものを食べたのである。つい先年のこと、東京のある繁華街のさる飲食店ーワニやらダチョウやらを供給する、いわゆる飲み屋ーで、「蛙の丸焼き」というメニューが目についた。ぼくはこの小学校低中学年の頃にカエルのモモ肉を食べたつきり、その後食料としてのカエルとはとんとおさらばの状態であったので、懐かしさのあまり、注文をした。やたら骨っぽいそれは、ぼくの記憶の彼方にある、あのほんのりとした甘みのあるカエルのモモ焼きとは、まるで味わいが違った。記憶は、やはり、美化するものなのか。

イナゴは食べたがバッタは食べない

結論から言えば、食用蛙というのは食用に特化されて人工飼育されたアカガエル属ウシガエルで外来物であるのに対し、ぼくが子どもの頃食べたのは、まさに和物蛙なのであった。ウシガエルと同様にアカガエル属であるが、田植え前、田植え後共に、水田に棲息するニホンアカガエル、ヤマアカガエル、ヌマアカガエル等で、ウシガエルよりはるかに小型種である（どんなに大きくても 10 cmにはならない）。

我が家は農家の一角を借用した住宅であり、お隣とは、もともと引き戸一つでつながっていた。そのお隣を屋号の「天野屋」と呼んでいた。「天野屋」さんは先祖代々続く農家である。「天野屋」さんのおかみさん一女あるじ、ぼくからすれば「けっこう怖いけど、やさしい、アマノヤのおばちゃん」一が、「コウちゃん、これ、食べな」と言って手渡ししてくれた「おやつ」の一つが、「焼きたて・アカガエルのモモ焼き」であった。人差し指と親指の先に指の付いた脚をつまんで持ち、口に入れて歯を立てて、脚を引くと、モモ肉が剥がれて口の中に残る。軽く塩をふってあったのだろうと思うが、口内に、じわっと肉汁が滲み出し、ほんわかとした甘みが残り、歯ごたえがしなやかであった。

アカガエルのモモ肉のおやつは、「天野屋」さんの田植え時に限っていた。だから、そうしばしば食べたわけではない。戦後のいわゆる食糧難からほんの少し経った頃、がりがりにやせ細って熱ばかり出していたぼくの「今」と「行く末」とを案じてくれていた「天野屋」さんの、日本農村に伝承されている「ちょっとした食いモン」の「おこぼれ」が、ぼくの命を救い、健康を保持してくれた。その一幕の「カエルのモモ肉おやつ」であった。

しかし、「天野屋」さんは、恐かった。二度ばかり、恐怖を味あわされた。その一度が、どんな悪さをしたのかぼくにはほとんど記憶がないのだが、農機具をしまう小さな小屋に、荒縄でぐるぐる巻きにして放り込まれたことがある。そこは、ぼくたち子どもの間で、「絶対そこは入ったらあかんでえ。大っきなへびがおるんやでえ。そのへび、子どもなんか飲み込んでしまうそうやでえ」と、恐れられているところであったのである。泣き叫ぼうが足をばたつかせようが、絶対に許されることなく、ぼくは、大小様々に巻かれている縄や筵の間に文字通り捨て置かれ、ほとんど暗闇に近い状態に据え置かれた。しばらくして、がさごそ・・・、じゃー、じゃー・・・。ぼくの住む家の屋根裏ではいつも青大将がネズミを追っかけていた。天井板の破れ目から青大将が半身を落とすこともしばしばであった。その時の恐さとは比べようもないほどの、暗闇の、孤独の、縄で縛られ動きが自由にとれない状態のぼくに近づく音。そこから先の記憶はない。今で言えば、間違いなく虐待

イナゴは食べたがバッタは食べない

も虐待、大虐待である。が、絶対にいのちを奪うことはない虐待である。ぼくの肉体と精神をたくましくしてくれた一コマでもある。

それだからかどうだかは知らないが、へビは、ぼくの食い意地をはらすための食材候補に挙がったことは一度もない・・・あ、ウミへビは例外か。志摩の浜辺での、捕り立てウツボの浜焼きは、美味しかった！

[第2話へ](#)

[第3話へ](#)

[第4話へ](#)

[第5話へ](#)

[HP トップへ](#)